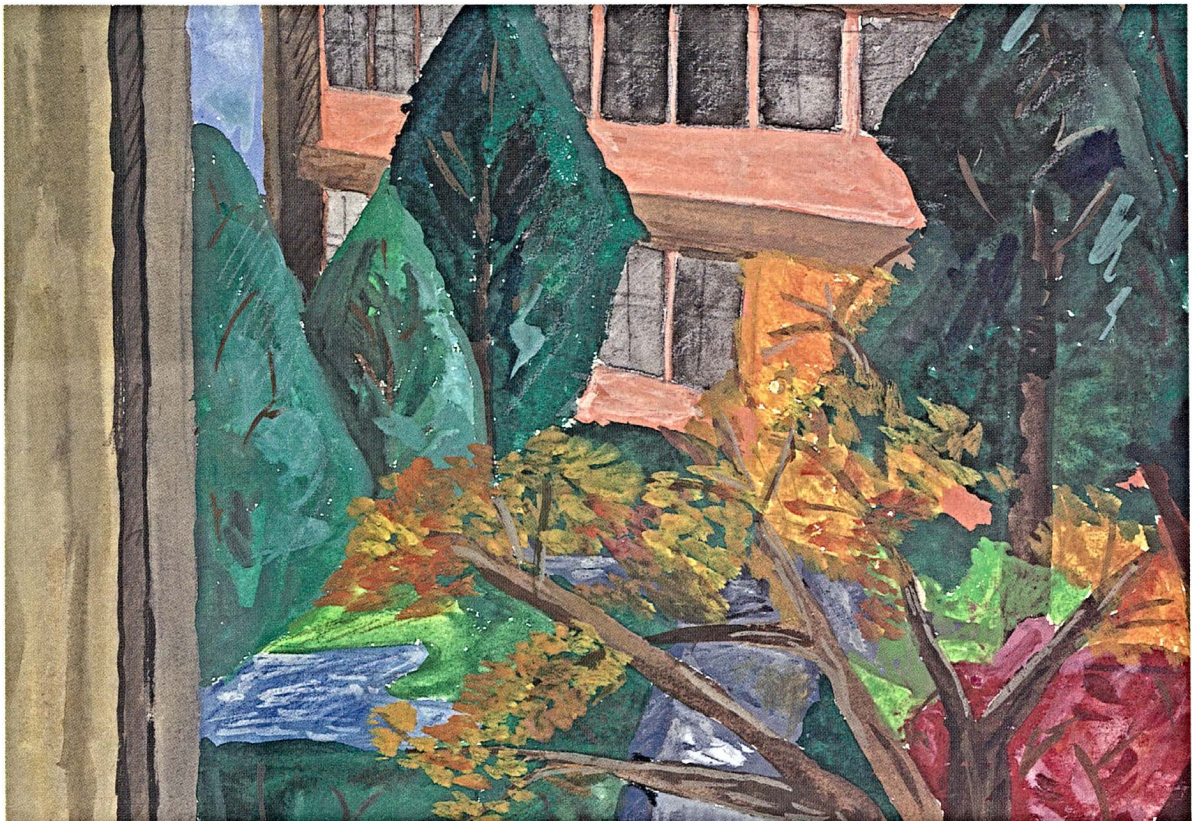


# 学園ニュース

富山大学  
No.58

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和 62 年 12 月 10 日



学内風景(その23)

教育学部中庭 山田 安希恵

## ~~~~~ 目 次 ~~~~~

専門課程移行のすべての富山大学生諸君へ .....	経済学部教務委員長 小松 和生 .....	2
新任教官紹介及びあいさつ .....		3
イタリアの美術大学と美術系職業人養成学校 .....	教育学部助教授 丹羽 洋介 .....	8
学部だより .....		9
学生部だより .....		17

## 専門課程移行のすべての富山大学生諸君へ

経済学部教務委員長 小松和生

昭和の農本主義者橋孝三郎、はじめて耳にする人もいるかも知れないが、彼は茨城県下の裕福な家庭に生まれ、優秀な成績で地元の中学を卒業して1912(大正1)年旧制一高へ進学、しかし3年で突如中退して農業に従事し、以降農業経営の傍ら近隣の子弟を集めて塾を開き、農本主義者を育成しようとするが、やがて昭和恐慌下で農業経営が破綻する最中に塾生を率いて5.15事件に突進(橋自身は「満州」へ逃亡)していくという人物である。

私がここで諸君たちに語りかけたいことは、実は秀才と言われた彼の半生を、このような悲劇に終らせた原因が一体何であったのかということにある。彼は一高在学中にニーチェやベルグソン、カーペンターさらにはシュペングラーなど、主に非合理主義思想ないしは「近代の超克」論を摂取して青春時代における自らの思想を形成していった。そのような思想を突如として具体化しようとした一つの帰結が一高中退、そして営農だったのである。したがって、自らも語っているが、営農の動機自体が近代合理主義への懐疑におかれていた。そのような思想を抱きながら営々として農業経営をつづけるうちに、やがて昭和恐慌の荒波をかぶって経営破綻をきたす。当然ながら鋭敏なる彼は、現実の世界、すなわち資本主義社会に矛盾を感じるが、その矛盾を資本と賃労働の矛盾、生産の社会的性格と取得の私的形態との矛盾とはとらえることができず、専ら工業と農業、都市と農村の矛盾ととらえ、そのような彼独自の資本主義への疑問から、封建制を否定して資本主義を生んだ瑞々しい近代の理性や合理主義そのものへの懐疑にむしろ結びつけていったのである。彼の脳裏に俄然抬頭してきたのが若き日に摂取したニーチェその他の「近代の超克」論なのであった。そのような発想の素地が一高時代からすでに形成されていたところに、実は彼の半生の悲劇がある。

やがて、そのような虚しい懐疑は科学技術や民主主義そのものまでにも及び、先輩格の農本主義者権藤成卿らによる大化の改新への回帰論の影響も手伝って、西洋近代文明否定、東洋文明の優越、その源流への回帰論へと増幅して、農業社会中心の原始回帰論に帰結

していくのである。それは単なる彼のロマンティズムにとどまるものではなく、現実にそのようなアナクロニズム的社会実現の手段として、天皇親政にもとづく「国家改造」論に期待をかけるに至るのである。こうしてテロリスト井上日召や狂気にみちた青年将校たちと組して日本ファシズムを大きく促進させる5.15事件へと突進していくのであった。

西洋文明に対する東洋文明の優越論も、アジアにおける日本の盟主論に結びつく十分な素地をもつものであり、事実、橋の「近代の超克」論は、結局、日本のファシズムとあの悲惨を生んだ日中戦争から太平洋戦争を促進させる思想と行動とに帰結するものでしかなかったと言えよう。

ところで昨今オカルトブームや奇怪きわまりない宗教が一定の「人気」を博するという時代を背景として、一方では有名な学者や評論家の一部にはあるが、ニーチェをはじめとする「近代の超克」論が再主張されて、民主主義そのものへの懐疑すら投げかけられるようになってきている。他方では環境破壊や首切り「合理化」頽廃現象など資本主義的生産関係に帰せられるべき否定的現象を科学技術や工業化・近代化一般で一括りして同一視し、エコロジー運動や歴史学者の一部には近代そのものや工業化一般を否定し、勢い古代や原始への回帰論を再主張しようとする動きすらみられるようになってきている。こうした動きに呼応するかのようになり、縄文社会や聖徳太子の「和の精神」こそ日本文化の回帰すべき源流とする梅原猛氏らによる日本文化論が最近とみにそのボリュームを上げているが、これとても戦前に権藤成卿らが唱えた古代回帰論の現代版であり、最近の「近代の超克」論の有力な亜種形態の一つであろう。

諸君たちはこれから社会科学や自然科学を専門に勉強しようとする訳であるが、戦前や戦後にわたって性懲りもなく繰り返される「近代の超克」論やその他の科学性を装った非合理主義論に惑わされることなく、社会や自然を正しく認識するために、まずは遅くも学問に取組んで欲しい。若き日の学問や思想の形成こそはその人の一生を少からず規定するからである。

そして、そのような正しい科学の知識を活用して、広汎な人々に真に役立つ工業化や近代化の事業を促進するための準備に邁進して欲しいと思う。そのような事業こそは、また核兵器の廃絶、学園や地域、社会の民主化の事業と分ちがたく結びついているはずである。

日本は高度に発達した資本主義国であり、文化、教育水準も世界の中でも屈指であると言われている。そのような日本が世界の平和と民主主義のためにリーダーシップを握れば、必ずや世界を動かし新しい世界史を創造していくことができるにちがいない。そして、

その日本の明日を担って生きるインテリゲンチヤ予備軍の若き諸君たちこそが、その創造の中心となるのであり、諸君たちこそがまさに世界史をきりひらく壮大な事業に取り組むことになるのである。それは決して不可能なことでも見果てぬ夢でもなく、きわめてリアルなことである。「より高く、より正しきは、みんなの共通した声だけであった」とはフランスの詩人ポールエリュアールのことばであるが、この理念を基礎にして互いに学問し、その成果を明日への創造に共に活かしていこうではないか。

## 新 任 教 官

- エンドレス、ウルリーケ  
外国人教師（人文学部） 62. 10. 1  
1977. 9 パリ大学卒業  
1981. 9. 1 文学修士  
担当：ドイツ語会話、ドイツ語作文
- 大西 武士 教授（経済学部）  
昭 28. 3（旧制）東京大学法学部卒業  
担当：民事法（債権法）
- 志津田 一彦 助教授（経済学部）  
62. 10. 1  
昭 57. 4 中央大学大学院法学研究科博士課程  
後期課程退学  
担当：企業関係法（商法概論）
- 松島 房和 助教授（理学部） 62. 10. 1  
昭 55. 3 東京大学 大学院理学系研究科  
博士課程修了 理学博士  
担当：レーザー物理学
- 草開 清志 助手（工学部） 62. 10. 1  
昭 54. 3 東北大学大学院工学研究科博士課程  
修了（工学博士）  
担当：金属材料学
- 須山 幸男 教授（教養部） 62. 10. 1  
昭 23. 3 九州大学理学部数学科卒業  
担当：数学
- 下川 茂 講師（教養部） 62. 10. 1  
昭 61. 3 東京大学大学院人文科学研究科博士  
課程単位取得満期退学  
担当：フランス語

## 新任のごあいさつ

人文学部外国人教師

Ulrike Endres



Watashiwa “Amerika?”  
dewa nai desu. Ich bin  
aus der Bundesrepublik D-  
eutschland, aus Konstanz  
am Bodensee. Dort habe  
ich russische und deutsche  
Sprache und Literatur stu-  
diert. Zuletzt habe ich

in einem gemeinsamen Forschungsprojekt des  
Fachbereichs Literaturwissenschaft über “Inter-  
textualität und Fiktionalität” mitgearbeitet.  
Dass ich nun in Japan bin, liegt daran, dass  
ich gerne auf brauchbare Zufälle eingehe und au-  
sserdem erkunde ich gerne fremde Länder. Reisen  
ist Lesen in anderer Form.

Manchmal empfinde ich das Leben hier als sehr  
anstrengend. Sowie das Land betritt, ist man  
von einer gnadenlosen Kakophonie der Bandauf-  
nahmen, Werbeslogans, Lautsprecherdurchsagen...  
umgeben – “im Land der Stille”. Diese über-  
mässige Besorgtheit der Automaten um die Men-  
schen ist irritierend. Es wirkt dem Gefühl von  
“Anzen” sozusagen entgegen. Aber gerade das  
ist es wohl, was mich jetzt schon das zweite  
Mal nach Japan gezogen hat (vorher war ich  
zweieinhalb Jahre als Lektorin an der Kanazawa  
Daigaku).

In der sowjetischen Literaturtheorie gibt es den  
Begriff der Desautomatisierung der Wahrneh-  
mung. Durch Verfremdung und Verstörung steigert  
sich ihre Intensität. Daran wiederum gewöhnt  
man sich und es ist schwer darauf zu verzichten...  
soviel zu meiner Motivation, hier zu sein.  
Natürlich gibt es auch allerhand Genüsse – vom  
Essen über die heißen Quellen zu den Festen –,  
die locken.

Toyama ist mir als Stadt sympathisch. Wenn  
man mit den Leuten spricht, wird bald das kul-  
turelle Defizitgefühl gegenüber Kanazawa zum  
Thema und man merkt, an den öffentlichen An-  
lagen, Museen, der Strassenbahn..., dass sich die  
Stadt bemüht, dieses Defizit – ob nun tatsächlich  
vorhanden oder nicht – zu füllen. Ausserdem  
scheint mir, dass hier traditionelle Verhaltensfor-  
men noch ziemlich ausgeprägt sind und es gibt  
für mich viel Neues – keineswegs “kenne ich mi-  
ch aus”. Ich werde mir Zeit lassen, alles kenn-  
enzulernen.

## 新任の御挨拶

経済学部教授 大西 武士



私は香川県琴手町に生まれ、  
小学校、中学校は香川県、高  
等学校は岡山、大学は東京と  
温暖の地で学生生活をおくり、  
卒業後も勤務地はずっと東京  
都内でした。此度、本学にお

世話になることとなり、はじめて富山にまいりました。  
富山駅の売店で絵葉書を買ってみると雪に埋もれた富  
山城の写真があり、大学について「富山大学概要」を  
いただき表紙をみると白銀の立山連峰が輝いていまし  
た。富山の雪とはどんなものか、冬が来るのが待遠し  
いやら、こわいやら好奇心がうずいております。

私は経済学部で民法を担当いたします。大学卒業以来金融機関に勤務し金融界で発生する法事問題の解決を担当してまいりました。おかげで実践的法務には慣れておりますが、諸先生方のように学者として正規の教育を受けておりません。最高学府で私の実践法務に関する経験がどこまで通用するか、懸念に堪えないところであります。金融界ではなんといいても利潤の追求が第一ですから、営業が先行し、新しい金融商品、金融システムが独り歩きして、法務がこれを息せききって追っかけるという状態が続いてきました。本学に奉職してこのような営業上のニーズに追われることは

なくなりましたが、今度は何もしなければそれでもすませることができるだけに、かえって立派な学問的業績を残さなければならないという良心の呵責が圧迫感となっております。もっとも2の方は現実のニーズがあるわけではありませんので、そのうちにあきらめてしまうかもわかりません。

以上、自己紹介をかねて現在の心境を申し上げますが、大学の教官、事務官、学生の皆様、それに富山市の皆様方またことによい方々ばかりで、公私ともに毎日快適に過しております。どうぞ今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

## 着任のごあいさつ

経済学部助教授 志津田 一彦



本年の10月1日付で、琉球大学法文学部から経済学部の一員に加えていただくことに相成りました。わたくしは、長崎で生まれまして大分で一時暮らしたことがございますが、長崎で10数年を過ごしました。大学は大阪、大学院は東京で過ごし、南国沖縄に何年か居りまして、このたびご縁がございまして富山で生活させていただくことに相成りました。日本列島の南西半分を恰も十字にきったように点々と移動してまいりました。

わたくしは、専門は商法でございますが、海商法を目下手がけております。先日テレビでも放送しておりましたが、北日本を中心として勾玉の原料たる翡翠（ひすい）をめぐる交易があったこと（長崎にも翡翠はあるものの、こちらとは成分やその濃度が違っているようです。）を知りました。また、琉球料理に出てくるコンブも富山の薬売り

と関係があり、薬が売れてしようがなく薩摩藩で差止処分されたので富山藩と売薬さんのグループが協力してコンブを北前船で送り、それ以後コンブが沖縄（当時の薩摩藩琉球王国）の地で食べられるようになったとも窺ったことがございます（高岡高商編『富山売薬業史史料集上巻』787頁）。このように身近な例をとりあげましても、いろんな分野で交易があったことが窺え、これまで点々と移り住んでまいりましたわたくしにとりましては、感慨深いものがございます。この狭い日本に、いろんな文化圏があるものだと、そしてそれをいつまでも大切にしていかなければならないと思います。

わたくしは、初冠雪の降りた、まさに壮厳というべき立山連峰を仰ぐ富山の地で、この恵まれた山紫水明の地で暮らすことができますのを、心より嬉しく思っております。まだまだ未熟者でございますが、教育と研究に微力を捧げる処存でございますので、何卒宜しくお願ひ申し上げます。

## 着 任 の 挨 拶

理学部助教授 松 島 房 和



10月1日から理学部物理のレーザー物理講座へ着任しました。レーザー光は人間が自ら造り出した特殊な光で、その様々な特長を利用すると原子や分子のようなミクロの世界でおこるいろいろな物理現象をつぶさに調べることができます。富山大は全国でもめずらしくこの方面の研究が充実している大学ですので、着任にあたっては先任の先生方の名を汚さぬようにと念じて参りました。

さて富山へ来てまず出会ったことは言葉の問題でした。というと大げさですが、地元の人との会話では時として聞き慣れない又は聞きとれない言葉があるので、すぐ問い直せばよいものを、あて推量で答えていると最後には会話がちぐはぐになって、お互い顔を見合わせたりする始末です。もっとも、ひと月以上経った現在ではこのようなこともなくなりました。

私の故郷は静岡県の三島です。朝な夕な霊峰富士を

目のあたりにして育ったためか、富士山にはとても愛着があります。のち上京してからも、デパートの屋上などから小さな富士山が見えると何かほっとしたものです。今度はそうもゆくまいと思い、広島生まれで富士山には何の未練もない妻に感傷をもらしたのが間違いでした。答えて曰く、「単に富士山の土の字がとれただけじゃないの。」けだし名言と感服しました。

冬仕度のことが話題になるというのもこれまで雪の生活を経験したことのない身にとっては一種の風情と感じられます。しかし積雪の日々の様子を耳にするにつれ心配も募ってきます。そのようなとき、研究室の学生諸君が温かい助言を与えてくれます。「雪の日のブーツは魚釣りに使うような腰まである長いやつが必要だ」とか「雪が降ったらあきらめて、慌てず騒がず学校を休め」等々。さてどうなりますか。

まずは最初の年、皆様にも御迷惑をおかけすることと思いますが、土のない富士山で頑張っただけでゆきたいと思えます。

## 新 任 の 御 挨 拶

工学部助手 草 開 清 志



10月1日付で金属工学科助手に着任致しました。富山大学は私が学部生活を送った母校ですので、その母校で教官の任に着いた事に強い責任を感じております。私は金属材料学の講座に所属しており、主に鋼中微量添加元素の役割と挙動、鋼の成形

性と集合組織、鋼の相変態と組織など、鉄鋼材料の研究に基礎を置いて研究を進めております。さらに現在、先端材料と目され、また社会の要求度の高い領域の研究にも目を向け、ニッケル基超合金、チタン合金などの組織と特性の解明に挑戦しております。

最近の金属学の分野は他の理・工学の分野と同様に新合金、新素材の開発、新機能、極限条件下の性能の追求、……と先端技術を支える要として、目まぐるしい発展を遂げつつあります。この渦中であって、現在の金属学は工学的に増々複合化、統合化されつつあり、また一方、学術が進歩すればするほど専門化、細分化されていっております。このような中で、金属学に携わる者として、如何なる姿勢で教育、研究に臨み、またこれらに如何なる貢献が成し得るのか、非力の身にとって課題は極めて大である訳で、目下模索奮闘している所です。折に触れてのみなさま方の御教導、御鞭撻をお願い致します。どうぞよろしく。

## 新任の挨拶

教養部教授 須山 幸男



10月1日、富山県立技術短期大学応用数学科から教養部に移って来ました。

これまで、微分方程の研究をつづけて来ました。また、最近暫くの間数学教育と日本語についての調査をしました。

広島生まれで、高校(旧制)までの20年間をその地で過ごし、その後九大を卒業、同じ大学の研究室に勤務して、25年前に短大開学と同時に富山に住むようになりました。というわけで、富山は私にとって一番長く縁のあるところとなるでしょう。

教科書の上でしか知らなかった頃、富山県から連想したことは雪、売薬、紙風船、山岳、蜃気楼、ほたるいかに、藁靴、くるう病、イタイイタイ病、そして私立富山高等学校(旧制)のあったことです。

その後、この学校は県立、国立と移りそして現在の富山大学になったことは御存知の通りです。

なにしろ、私立高校があるところといえば、東京と神戸という大都会であって、その総数は僅かに3校だったと思います。

それで、ここは大都会から遠く離れた地方とはいえ、田園都市ののびやかさと文化の香りとが程よく漂う風土だろうと想像していました。現実には少々これとずれてはいました。

気候温暖な土地に育つものは、雪は冬の風物と憧れます。それが、こちらでの最初の冬が38豪雪でした。自然の厳しさを教えられ、この地で生きて行くには律儀で、笑い少なくひたすら真面目に生活を律しなくてはいけないのかも知れないと思いました。

停年までは3年間と半です。なにぶんよろしく付き合い下さいますようお願いいたします。

## 新任の御挨拶

教養部講師 下川 茂



10月1日付でフランス語講師として赴任しました。これまで、高知、京都、豊中(大阪府)、

東京、船橋(千葉県)と、比較的温暖な土地に住んできましたので、富山の気候・風土の違いに、少しとまどっているところ。10月中旬に、一度、秋

とは思えぬ程冷え込んだことがあり、来るべき冬の厳しさを予感させました。しかし、ときおり町から眺められる立山連峰も、何度か訪れた岩瀬・八重津の海も、まことに美しく、自然が急に身近になったように感じています。

考えてみれば、私が専門とするスタンダードの故郷グルノーブルは、海こそ近くにありませんが、四方を

アルプスの山々に囲まれ、夏は暑く、冬は雪の多い盆地の町であり、これからスタンダードを研究していく上で、富山は恰好の地かもしれません。故郷の人間関係に苦しんだスタンダードですが、故郷の自然には終生愛着し、はじめてパリに出たときは、「山がない」ためパリを好きになれなかった程です。同時代のロマン派の作家たちとは一味違う彼の自然描写を解明する手がかりを、富山で得られたらと期待しています。もちろん、食物の種類と豊富さでは、日本海に面した富山の方が、はるかに優っています。豊かな自然のめぐみによって英気を養い、ねばり強く研究を続けていきたいと思っています。またフランス語教育に関しても、これまでの経験を生かしつつ、あらたな気持でとりくんでいきたいと考えています。学生諸君の協力と、諸先生の御指導、御鞭達を御願ひする次第です。

## 「イタリアの美術大学と美術系職業人養成学校」

教育学部助教授 丹羽洋介

イタリアの都市で一番好きなのはどこか、と聞かれたら困ってしまう。全ての都市が個性的で、それぞれに魅力的だからです。私は国立ヴィラ・ジュリア美術館に籍を置いて壁画の研究を行ったので、ローマに住んでいましたが、壁画を見るために各地の地方都市を訪れる事も多かった。どの都市にも固有の歴史と文化があって、その町の誇りとする都市の顔があるのは、実にうらやましい事です。

ところで、機会があって、イタリア各地の美術学校を訪ね、その授業内容を見学しました。国立の美術学校としては、アッカデミア・ダルテ（国立美術大学）が11校と、イステイテュート・ダルテ（国立美術系職業人養成学校）が23校あります。アッカデミア・ダルテは、高校又はイステイテュート・ダルテを卒業した者が入り、4年制です。イステイテュート・ダルテの方は、中学校を卒業した者（13～14歳）が入り、5年制です。日本では国立の美術系学校は数える程しか無いのに、合わせて34校もあるのはさすが芸術の国イタリアです。特に、イステイテュート・ダルテに相当するものは、我国では皆無です。手仕事を大切にしてきたイタリアが、国を挙げてこの分野に力を入れている事の表れでしょう。

イステイテュート・ダルテの専門コースは、次のように広範囲にわたっています。木工、金工（彫金、鍛金）、織物、染色、服飾、絵画、装飾絵画、彫刻、壁画、モザイク、絵画修復、印刷、写真、建築、インテリア、陶芸、工業デザイン、舞台デザイン、革細工、グラフィック、宝石細工、ガラス工芸、ステンドグラス、化粧漆喰、レース編みなどです。もちろん、各学校に全てのコースがあるわけではなく、学校によっていくつかの固有のコースを持っています。例えば、ヴェネツィアではガラス工芸、ファエンツァでは陶芸、カッターラでは大理石と言うように、その土地の伝統的産業に関連して、各学校が得意とするユニークなコースを持っているわけです。ここを卒業した者は、そのまま美術系職業人として各分野で仕事につく事が可能です。一部の者はアッカデミア・ダルテに進み、さらに美術家としての勉強を続ける事になります。なるほど、ミケランジェロにしてもレオナルドにしても、最初は工房に入って、美術職人としての修業から出発したのであった。言いかえれば、偉大なルネッサンスの

芸術も、一部の大家のみによって生み出されたものではなく、高度の職人技術の集大成として成立したのではないのでしょうか。このルネッサンスの大工房のようなイステイテュート・ダルテの諸設備は、大変充実しています。授業の方法は、確実に段階を経て、誰でもが一定のレベルに達するようになっているようです。つまり、手によって覚え手によって考える事に、徹底して時間をかけているのでしょう。入学試験は無いので、生徒の質はまったくマチマチだが、制作量が多いので、高学年になると驚く程高度のものを作り出しています。

学校の校風も、町と同じように個性的です。例えば、同じ北イタリアのモデナとパドヴァを比較すると、かなり対照的です。モデナは陸軍士官学校のある町で、静かで落ちついています。喧噪のローマから来ると、まるで外国に来たような気がする位です。町と同じように、モデナの学校の授業は伝統に根ざしたもので、非常に堅実な印象を受けました。一方のパドヴァは、イタリアの町としては現代的で活気があります。各科とも、モダンなセンスで新しいタイプの作品を目指していました。このパドヴァのイステイテュート・ダルテは、特に雰囲気の良い学校でした。学長がとても気さくな人で、みずから全教科を案内して説明してくれました。学校全体に活気があって、学生も真剣な態度で、しかも親しみやすくなごやかでした。

思えば、イタリアは不思議な国です。一方では、ミラノやトリノなどで世界の最先端を行く工業製品を生み出しつつ、それと両立する形で、ルネッサンスの大工房のような職人世界が今でも展開しているのです。全体的に見ると、イタリアでは機械製品に対する信頼度は高くありません。ローマのテルミニ駅の地下鉄のエスカレーターが、一台も故障しないで全部が動いている光景は、ついに一度も見ることがありませんでした。きびしい輸入規制にもかかわらず、日本製品が町に溢れているのも無理はないかも知れません。しかし、その優れた日本の工業製品も、元はと言えば、ヨーロッパでの伝統的手仕事の延長線上にあるのではないのでしょうか。パドヴァの美術系職業人養成学校の学長に聞いてみた。『こんなに若いうちから実技の訓練に専念できると良いですね。日本ではこうは行きません。』気さくな学長のこの時ばかりは真剣な力のこもった言



葉が強く印象に残った。『そう、でもこれでも遅い位 ですよ。特にこうした手仕事の勉強にはね。』

## ◇◇◇◇ 学 部 だ よ り ◇◇◇◇

### ◆ 人 文 学 部

この度、本学人文学部の藤本幸夫先生（朝鮮語学）と大和文華館の吉田宏志氏（朝鮮絵画）共訳の『朝鮮絵画史』（安輝濤著，吉川弘文館刊，1987年3月）に対して、日本翻訳者協会より1987年度の日本翻訳

出版文化賞が与えられました。この賞は学界に貢献すること多大と考えられる良質の翻訳出版物に与えられるものです。（K・Y）

### 遼寧大学副教授 顧奎相先生講演会

#### 「中国の改革と現状－中日の歴史より見た－」

去る10月21日(水)午後3時～5時、本学人文学部122番教室において、顧奎相氏の講演会が開催された。

氏は本学と友好関係にある中国遼寧大学歴史系の副教授で、同大学の副学長でもある。本年8月31日から11月3日までの約2ヶ月間、友好学術交流の打ち合わせと研究のために来日された。氏の専攻は中国前近代史と史学史であり、著書には『司馬光』『中国古代改革家』『資治通鑑選読』『改革理論探索』等多数がある。特に歴史上の改革に対する関心が強く、それらの分析の結果を現代の改革にいかにか活かすかが、氏にとっての究極のテーマだとされる。氏自身、遼寧省行政管理学会副会長の要職を兼任して、実地に改革に取り組まれており、今回の来日を機に上記の標題で記念講演が行われた。その概要は以下の通りである。

中日両民族は偉大な民族で、悠久の歴史を持ち、人類の発展のためにともに貢献をなしてきたが、両国の発展の様はそれぞれ異なっている。例えば中国は唐宋時代には先進国であり、日本は中国から多くを学んだが、近代になるとその立場が逆転し、日本は世界の経済大国に成長した。この相違をもたらした原因は多数あるだろうが、最も重要なことは改革の果たした役割である。改革が先進と落後、繁栄と衰亡とを決定したのである。

ここで三つの問題を提示して、諸先生方の教えを請いたいと思う。第一点は、歴史は改革の中で前進する、ということである。日本では大化の改新と明治維新が有名だが、特に後者は“富国強兵”“殖産興業”をスローガンに多くの改革がなされ、日本を短期間のうちに資本主義国家に発展させた。改革が日本社会に質的

(要約) 人文学部助教授 檀 上 寛

飛躍をもたらしたのである。

これは中国も同様である。分烈割拠の戦国時代を収束させたのは秦だが、秦は当初弱小国家で孝公の時から改革を始め、始皇帝の代に中国を統一した。始皇帝は郡県制等の諸改革で専制主義的中央集権制度を確立し、この体制は以後二千年以上にわたって継続することになる。やがて唐代になると、太宗李世民が人材を重用して改革を行い、“貞観の治”と呼ばれる時代を出現させた。この太宗の事業を引き継いだのが則天武后であり、それをさらに継承発展させたのが玄宗である。玄宗の時代は“開元の治”と呼ばれ、封建時代の最盛期を生み出した。ところが近代になって、百日維新が保守派の西太后の弾圧で失敗すると、それ以後中国の政治は腐敗的、暗黒的なものとなり、半封建・半植民地への道程を急速にすべり落ちていくことになる。以上の事実からも分かるように、改革は発展と進歩とを推進し、改革の内容がよければ歴史の発展も早くなるのである。

次に第二点としては、中国の現今の改革は必ず成功するということを挙げたい。現在中国では第二次革命と呼ばれる改革が進行中で、中国はこの改革を経ることで新しく生まれかわり、経済力も必ず飛躍するものとする。ただしそのためには、次の三つの条件が備わる必要がある。第一は、最高指導者が確固たる改革派であること。歴史上においても、皇帝が断固として改革に取り組んだ時には必ず成功している。秦始皇、漢武帝、唐太宗、則天武后、宋太祖、明太祖などみなそうである。第二の条件は、改革政策が継続して行われることである。唐朝が封建王朝の全盛期を現出したのは、太宗、則天武后、玄宗が改革を継続したからで

ある。第三に、改革と並んで開放政策が重視されていることである。国の門戸を開いて、先進国家の技術や管理の経験を導入することで、初めて前進の歩調を加速できるのである。

以上を要約すれば、歴史上の改革は、最高指導者の皇帝が改革を堅持し、改革政策が継続して中断せず、かつ開放政策が実行された時には成功したし、そうでなければ失敗したといえる。私は以上の歴史的事実に照らして今日を考察したところ、改革の成功を保証する条件はすべて備わっているものと考え。それ故、中国が現今進めている改革は必ず成功すると確信するのである。

最後に、中国の改革の現状について述べてみたい。現在の改革事業は1978年第11期3中全会に始まり、その後農村改革は相当進行して堅実な物質的基礎がもたらされた。この基礎の上に立って都市の経済体制の改革も行われ、多くの中小企業では租賃制・承包制・労働分配制などを導入して、生産を飛躍的に増大させた。また政治体制の改革については、来たる共産党第

13回代表大会で幹部の若返りが図られ、旺盛な精力で各方面の改革が進められていくはずである。さらに教育面については、今日知識人の地位は四人組時代に比べて大きく向上している。

しかしながら、中国は歴史が古く、改革は困難で一朝夕に達成できるものではない。そこには過程が必要なのである。従って改革の現状を一言で概括すれば、“困難を伴いながらも、第一歩には勝利を収めた”といったところであろう。今後の展開は、改革の大会である第13回代表大会以後のことであり、この大会こそ中国の改革を新たな一章の上に書き込むことになると考えている。

講演を終えるに当たり、七言律詩「訪日抒懷」一首を賦して、私の訪日の体験と心情とを表明したいと思う。

金秋時節訪東隣 步履所及耳目新  
博采友邦精妙処 引入華夏補乾坤  
亦望諸卿多光顧 尽備美酒宴佳賓  
東渡西航頻交往 鑑真阿倍可慰魂

## ◆ 教育学部

### 教育実習をめぐって

附属中学校教官 実習部主任 大澤 保

9月17日・18日の両日、教育実習中ではあったが、北信越地区協議会に参加のため長岡に滞在した。私は英語科主任という立場で、英語の授業を参観し、他校の先生方と研究内容等について意見を交換した。一方、実習部主任ということで、「教育実習」のことも気になったので、他校の教育実習の実施状況等を稲垣副校長にお聞きした。それによると、他校では教育実習を3年次のうちに終えてしまうか、4年次でも6月のうちに終えてしまうとのこと。

昨今富山県では、教員採用試験の結果（内定）の通知が段々と早まり、それにつれて実習生の教育実習に対する評価も早く出さざるを得なくなっている。また、4年次の教育実習が始まる前に、第1次採用試験の結果がわかっているので、中には「気」の抜けた実習生が少なからず存在することになる。そのような実習生に受け持たれる中（小）学生ほど、かわいそうなものはいない。実習校としても、はなはだ迷惑なわけで、「中（小）学生には何の罪もないわけだし、見方によっては、すぐ先生になるよりは心の痛みのわかるよい

先生になれるかも知れないよ。」等と奮起をうながさざるを得なくなる。

富山大学教育学部ならびにその附属校園がとっている今の「教育実習」のシステムは、これはこれではなかなかのものである。すなわち、3年次で一度教育実習をやって、失敗も含めてそこで得たものを次年度に生かすやり方は優れたやり方だと思われる。しかし上述したように、「教員採用試験」ならびに「教育実習」をめぐり厳しい状況を考えると、教育実習のよりよいあり方について考えてみる時期が来ているように思われる。

今年の4年次の教育実習は9月28日で終わったが、その反省会でのこと。一人ひとりが感想をおりまげながら反省を述べた。その中で一つ私の心に強く残ったものがある。

「去年は生徒が嫌いだった。去年は自分が殻を作っていて、そこから出ていかなかった。今年の実習で、自分なりに生徒にぶつかっていくうちに、自分の未熟さを反省しました。一度は教職を断念した私ですが、

もう一度自分の道を真剣に考えてみたい。」

それを聞いて、私は何故か救われたような気がした。彼女の他にも、教職に就くのを最初からあきらめて教育実習にのぞんだ学生もいたようだし、2人の学生が実習を受けない事態も生じた。そういう中で一人でも「生徒を指導し、人を育てる喜び」を見いだした学生がいたことを、私はとてもうれしく思った。

3年次の実習生諸君！あるいは来年以降教育実習を受ける学生諸君！教育は楽しいことばかりではない。生徒に期待しては裏切られることがしばしば。でも、ほんのちょっとした瞬間に、「教師をしていて良かった」と思うことがあるのだ。

最後に、附属中学校の機関紙「たがえし」(173号)に、「実習生諸君へ！」という題で私が寄稿したものがあがあるが、実習生諸君の参考になると思うので、それをここに再掲したいと思う。

今から11～2年前、私は実習生(聴講生)として附属中学校の教壇に立っていた。その私が今は、実習生の世話をする実習主任をしており、巡り合わせとはいえ、不思議なものである。

「実習」に際して、私はこれから始まる生徒との出会いに心をときめかせた。そして、生徒らの熱いまな

ざしに負けまいと、夜遅くまで教材研究をし、どのようにすればよりわかり易くなるかと頭を悩ませたものである。また、生徒への生活指導が甘くならないように、ケジメをつけて張り切ってやった覚えがある。

実習生の実習に対する考え方や取り組み姿勢は、今も昔もそれほど変わらないと思うが、全般的に見れば「淡泊に」あるいは「おとなしく」なったような気がする(実習を受ける側にも問題がないではないが)。実習生が先生方と違う大きな点は、「若い」ということである。「若さ」は「未熟さ」に通じるが、生徒は実習生の「エネルギー」に期待し、「熱心さ」に応えるはずである。

最後に、生徒の声をいくつかひろってみよう。その中から、実習生諸君が教師をめざす上で「何か」をつかんでくれれば幸いである。

「とても明るくて、新鮮な感じ」、「教えるのがへただし、いやだな」、「一味違う勉強ができて案外楽しい」、「先生であると同時に、人生の先輩」、「声が小さい。もっと思いっきりやった方がよい」、「うるさい時は、私たちのためを思って、鬼になって悪いことを指摘してほしい」、…………。

## 教育実習を終えて

教育学部4年 篠島祐子

小学校、中学校を合わせて一カ月に及ぶ実習が終わりました。この一ヶ月間、朝7時前に家を出る忙しい毎日、たいへんではあったが充実した日々であったと、今、改めて思います。子どもたちとともに考え、生活することのできた教育実習という経験は、大学の講義では得ることのできない、多くのことを学ばせてくれました。

その中でも、今回の実習で強く感じたことは、ひとりひとりの子どもの考えをしっかりと受けとめ、聞くことの大切さです。教師は、このことを頭にしっかりと入れて、授業を組み立てているはずですが。私も私なりに、教材研究に励み、授業に臨みました。しかし、自分の頭に描いた授業を展開しようとするあまりに、今そこにいる子どもの姿や考えをとらえることができなくなることがよくあったのです。自分の予想する反応や答えを期待して無理にその方向に進めようとしたり、

予想もしない反応や子どもたちの考えにとまどい、しっかり子どもの考えを聞くことができなくなったりしたのです。しかし、この教師が予想もしない、子どもらしい発想こそが、授業を生きたものにするということを、今回の実習でも強く感じました。そして、教師が何かを教えてやろうといった思い上がった気持ちを持たず、子どもとともに考え、学んでいくことが大切であるということも強く感じることができました。

こうした気持ちで実習を終えて、先日、本を読んでいたら、現場の先生の次のような詩に出会ったので紹介しておきます。

ああでなければならない  
こうでなければならないと  
いろいろに思いめぐらしながら子どもを見ると  
子どもは実に不完全なものであり

鍛えて一人前にしなければならないものようである

いろいろなとらわれを棄て

柔らかな心で子どもをよく見るとき

そのしぐさのひとつひとつがじつにおもしろく

はじける生命のあかしとして目に映ってくる

「生きたい、生きたい」と言い

「伸びたい、伸びたい」と全身でいいながら

子どもはそこに未完の姿で完結している

私が、今回の実習でいちばん強く感じたことが、この詩の中にあると、読んだときに思いました。子どもたちはどの子も、伸びたがっている。学びたがっている。この子どもたちの気持ちを大切に、子どもたちとともに考えていけば、自然にねらいが生まれ、学習が生まれてくるはずです。この当然といえば当然のことを、小学校実習においても、中学校実習においても強く感じました。

また、教師が、自分をさらけ出すというか、自分のありのままの姿を見せていくということの大切さを学ぶことができました。このことは、中学校実習で強く感じました。中学校では、小学校と違って、年齢的なこと、教科担任制であるということも手伝ってか、生徒から私に声をかけてきてくれるということは少なかったのです。私も、最初のうちは、少々とまどってしまいました。そんなある日、担当の先生が、私に1時間、私の話をする時間をくださいました。自分の小学校や中学校時代のことなど、二十年ちょっとという短い経験であるけれども、一生懸命話しました。一時間話をするということは、なんてたいへんで難しいのだろうと感じながら話しました。その一時間、私が話した後の生徒たちの反応は、それまでと全くかわりました。私を身近に感じてくれたのでしょうか。男の子も女の子も、生徒たちのほうからどんどん話しかけてくれるようになったのです。そしてこのとき、最初からもっともっと自分から生徒たちに積極的に話しかけ、

関わっていくべきだったと反省しました。子どもたちに、教師のありのままの姿をみせれば、子どもたちも安心して自分のありのままの姿をみせてくれるようになるのだということを感じました。このことは中学校だけでなく、小学校でも言えることだと思います。教育は、人と人との関わりの中で行われています。教師も子どもたちも、自分の本当の姿をみせることのできる、すばらしい信頼関係を築いていくことを大切にしていきたいと思いました。

そして、もう一つこの実習で学んだ大きなことは、教師のありのままの表現は、ことばを通してと同じく、体を通して行われるということです。すなわち、子どもとともに体を動かすことの大切さです。休み時間に子どもといっしょに遊ぶこと、そうじの時間にそうじをともにすること、中学校においては、部活動で生徒とともに練習し汗を流すことなど、教師自らが体を動かして教えるということの大切さ、すばらしさを改めて知りました。子どもたちにとって、自分とともにがんばってくれる、一生懸命になってくれる先生の姿を見ることが、どれだけ励みとなり、やる気をおこさせてくれるものであるかを知りました。子どもたちは、ほんとうに先生のことをよくみているものです。このことは、授業中子どもたちが、私が、漢字の書き順を一つまちがえたことを見逃がさなかったことからもうかがえます。「うしろ姿の教育」ということをよく耳にしますが、まさにその通りだと思います。教師として、子どもの前に立つ以上身なりや心構えをしっかりととしてのぞまなければならないというこれもまた当然のこと、もう一度再認識できました。

今、去年、今年の実習を終えて、そしてこの文を書いて感じることは、やはり、教師になりたいということです。子どもとともに考え、動き、感じることで先生になりたいということです。そのための努力を、これからも惜しむことなく続けていきたいと思っています。

## 昭和62年度教員養成学部学生合宿研修(秋季)を終えて

教育学部実行委員長 太田 富士弥

教員養成学部学生合宿研修(秋季)は今回で10回目を数え、研修を通して(1)教育的活動での指導力を身につけること(2)共同生活の中での連帯感の育成を図ることを主たる目的として、国立立山少年自然の家で行われました。この研修は、私達学生が自主的に企画、運営することが前提になっており、私達企画委員は何からやって良いのかまったくわからない状態で準備を始めました。ただ全員一致した意見である例年にないもの、例年以上のものをやろうとの思いを抱いて各企画に取り組みました。

第1日目はオリエンテーリングで始まりました。ここではお互いにまだ良く知らない人が多かったため、班行動をとってより親密になるには良い機会でした。また、教育現場に入った時に、この活動の中でどんな点が困難なのか、どのような助言をすれば良いのかを理解しようと思い、コースは小学生向けの簡単なコースを選びました。しかし簡単であるはずが、山を登ったり沢を下ったりと運動量の多さに驚きました。

夕食後13グループにわかれて座談会を行いました。ほとんどのグループが「結婚」について話し合ったようでした。私の参加したグループでも、このテーマについて自分が抱えている結婚のイメージや結婚に対する考えなどを述べ合いました。その中で男子と女子の結婚に対する考え方の違いが浮き上がり、お互いの違った考え方を吸収できたのではないのでしょうか。

そして、就寝時間になったのですが、ここで大騒ぎをしてしまいました。事の発端は、2日目のキャンプファイヤーで踊るフォークダンスの練習でした。初めは静かだったのですが、次第に声が大きくなり、ついには男子学生全員が大部屋で一つの輪になって、練習をし、その音が館内に響き渡るといった状況になりました。そのため、同宿の小学校の先生から注意され、前代未聞であるとの職員の方の言葉に深く反省している次第です。

第2日目のクラフトでは、今回は竹細工を行いました。できるだけ作り易くしてもらおうとの企画委員の配慮から、事前に「竹でつくるおもちゃ」という題材が与えられていました。ほとんどの学生が、竹細工は初めてとあって、固定観念にとらわれないユニークな作品が数々出来上がりました。企画委員との準備打

ち合せでは、もっと多くの資料を配布しておく方が良いのではないかとの意見もあったのですが、作るものが集中してしまうので避けようと話し合ったねらいが的中した形となりました。作品発表会では、参加された先生方が、昔とったきねづかとばかり作られた竹とんぼが、天高く舞い上がり、学生の中から感嘆の声が上がりました。

そして今回の研修のメインとでも言うべき野外炊飯とキャンプファイヤーに移りました。この頃になると各班共に班活動がスムーズに行えるようになっていました。それでも、野外炊飯の準備は、日頃慣れないことだけに非常に大変だったようです。調理の時間が各班で違ったため、食事の始まった班の皿の上に灰が降っているようなアクシデントもありましたが、どの班でもおいしそうに食べていました。

キャンプファイヤーは、この成否が研修の成否を決めると言っても過言ではなく、企画委員の力の入れように驚かされていました。キャンプファイヤーの盛り上がりは例年以上のものを見せ司会者のプログラムの進め方、話し方など、私達が指導者として参加する時に大いに参考になったのではないのでしょうか。また終了後に企画委員が流した涙に、眼を赤くした人も少なくなかったと聞きました。

最終日は、疲れの残る中でのハイキングでした。ハイキングより登山と言う方が適当と思われるコースを巡りました。コースは長短2通りを準備し、各班で選択してもらいました。2コースを設けた事で時間内に全ての班が戻って来ました。

最後の反省会では先生方からの自主的に行って良かったとのご感想に胸がいっぱいになりました。

県内出身者が多くを占める教育学部では、自宅通学の学生が多く、深夜まで友達と顔をつき合わせて話し合う機会がありません。このような中において、今回の合宿のように寝食を共にする事は、友情を深め合う事においても、私達にとって大変貴重かつ有意義な経験でした。

最後になりましたが、御指導下さった立山少年自然の家の職員の皆様、参加下さった先生方、事務職員の方々には深く感謝し、今後の研修においても変わらぬ御指導をお願いいたします。

# 1987年度化学史研究発表会を開催して

教育学部教授 林 良 重

日本化学史学会は、化学史関係の学会としては我が国で最も古く設立された伝統ある学会である。年に一度全国各地で大会を開催し、その回数も本年で15回を数えている。しかし、当富山での開催は、その機会に恵まれないまま今日に至ったが、去る10月2日(金)～4日(日)の3日間にわたり、第15回大会を本学部を主会場として開催することができた。以下、その概要を報告する。

会期中、招待講演1、特別講演2、一般講演10があり、さらにシンポジウム「化学史研究と化学教育」として、4件の講演があった。

## 一般講演

1. 19世紀のオランダの化学・薬学の学統 — 幕末の蘭書・オランダ医の学統を探る  
(三菱水島病院・ライデン大)  
○石田純郎, ハルム・ボイケルス
2. 蘭文『格致問答』6冊(含付図)と本屋の責任  
(愛知学院大) 千野光芳
3. ロバート・ボイル『懐疑的な化学者』の第二版(1680年)について  
(千葉・習志野高) 赤平清蔵
4. ピーター・ショウとシュタル化学のイギリスへの導入  
(東大院) 川崎 勝
5. 職業としてのChymist — 18世紀中葉のロンドンにおいて —  
(名大院) 大野 誠
6. 宇田川榕庵と温泉化学  
(金沢大) 本 淨 高 治
7. 元京都帝国大学理工科大学教授織田顕次郎について  
(大阪産大) ○木下圭三, 田中和男
8. アセチレンの水和反応 — その発見と解明の検討  
竹林松二
9. Staudingerの科学活動と政治的葛藤  
(横浜商大) 古川 安
10. 分子軌道法の実在の認識について  
(新潟大) 藤 峰 千代子

招待講演は、潘吉星氏(中国科学院自然科学史研究所)の「カール・ショルレンマーについて」(通訳つき)であった。

特別講演は、難波恒雄氏(富山医科薬科大学)「本草の中の化学」と、廖正衡氏(中国東北師範大学)「化学方法の発展を論ずる」(通訳つき)であった。

シンポジウムでは、戸田一郎氏(富山第一高校)の「高校理科からみた『舎密開宗』の実験」、日吉芳朗氏(石川・門前高校)の「化学史上の諸実験と化学教育」、藤井清久氏(東京工業大学)の「非国教徒学校(Dissenting Academy)における化学教育」、柏木肇氏の「19世紀初期イギリスの科学教育運動—メカニクス・インスティテュートに関して—」が発表されたが、戸田・日吉氏の発表は、高校における化学史上の実験を導入した化学教育の実状に関するもので、藤井・柏木氏の発表は、化学教育そのものの歴史に関するものであった。

本年度の研究発表会の特徴は、招待講演、特別講演にそれぞれ中国の教育・研究者が登壇したことと、特別講演において富山医科薬科大学和漢薬研究所の難波氏が「本草のなかの化学」について講演されたことである。潘・廖両氏の講演は、日中友好の面からも有意義であったし、難波氏の講演は、学際的な点で、参加者の注目を集めた。

本会は隔年東京において開催され、東京は参会者の数が圧倒的に多いのが過去の通例であったが、本年はその通例を破り地方で開催したにもかかわらず、近年にない多数の参会者をみたことは、主催者の一人として同慶の至りである。また、シンポジウムのテーマとして「化学史研究と化学教育」を掲げたが、化学史研究と化学教育との相互作用についての討論が、時間の不足から不十分であったことは残念である。今後の継続テーマとしたい。

## 日本動物学会第58回大会を終えて

理学部教授 小 島 学

先般10月7日～9日の3日間に亘り、本学教養部ならびに人文学部において表記の大会が開催された。日本動物学会は、生物学関係の学会としては最も古く設立された伝統ある学会であり、設立以来、日本の動物学の各分野での発展のため、いろいろ重要な役割を果たして来ている。同学会は年に一度大会を開き、この時、全国の国・公・私立の大学・研究所及び民間の研究機関などから研究者が多数集まって、最新の研究成果を発表し意見を交換し合う場となる。動物学の発展に伴い、大会で発表される研究分野も拡大し、現在では、分類・系統学、形態学、細胞学、内分泌学、発生学、遺伝学、免疫学、生理学、生化学、行動・生態学など広範囲に及び、それらの中にはバイオテクノロジー的手法を駆使した研究も、数多く含まれている。今、少しつけ加えると、こうした大会の開催は、全国を7ブロックに分けた学会の各支部により輪番で担当されており、今年度は中部支部がひきうけることになった。北陸地方では、金沢で開催されたことはあるが、当富山地区はその機会に恵まれず今日に至って来たため、今回の富山大会となった次第である。

大会開催中の3日間は、早朝雨にたゞられた日があったとは云え、幸にも北陸の地としては好天が続き、準備委員会一同はホッと安堵の胸をなでおろした。大会は、初日の午前・午後とも一般講演、夜は各種関連集会（ワークショップやシンポジウムなど）、第2日目の午前は一般講演、午後は総会と動物学会賞受賞者講演、夜は懇親会、そして、最終日は午前・午後とも一般講演という日程で行なわれた。申込み締切日である7月15日の時点での大会参加希望者数は667名、講演発表希望数は565題であったが、最終的には、大会当日の出席者を加えると総参加者数は1000名をはるかに超え、発表講演数も638題となった。又、関連集会も14を数え、いずれも前々回の東京、前回の福岡での大会を上廻る数字となり大盛況であった。それにも拘らず、大会中、各会場の運営が非常にスムーズに行なわれたのは、ひとえに、総勢110名に及ぶ富山大学内外の関係者と学生アルバイト諸氏の誠意あふれるご尽力の賜物である。たゞ、600題を越す講演申込みに対して、人手不足から止むを得ず講演会場を10会場としたため、第2日目の午後を除いた初日から最終日まで

の2日間半は、午前9時から午後5時まで講演が行なわれるというハードスケジュールとなり、特に遠方からの出席者で最終日の午後の講演をお願いした方々には、大変な御迷惑をおかけするハメになってしまったことは今でも心残りである。とは云え、各会場とも最終日まで、活発に意見の交換が行なわれた。講演者各自の持時間は瞬く間になくなり、座長は、その討論をやむなくうち切るのに苦労されるという場面も数多く見られた。一方、初日の夜の関連集会は、夕食後開催というハンディキャップにも拘らず、朝から夕方までの一般講演にひきつづき熱心な参加者で溢れ、ある会場では、予定終了時刻を30分以上もオーバーする白熱した討論がかわされた程であった。第2日目の午後、総会にひき続いて、本年度日本動物学会費を受賞された山口大学の千葉喜彦教授と、東京工業大学の星元紀教授により受賞記念講演が行なわれた。先づ、千葉教授が、我々生物の体内に存在する、所謂、体内時計に関する「行動の時間生物学的研究」と題して、次に、星教授が、生物にとって新しい個体としての出発点となる卵と精子との出会いに関する「受精機構の生化学的研究」と題して講演された。お二方とも、限られた時間内に、国際的にも高く評価される輝かしい研究成果を手際よくまとめて話され、出席者全員に大きな感銘を与えた。この受賞者講演のあと、学生会館で懇親会が開かれた。500名以上の参加者のため、会場として隣り合わせの2部屋を使用しての大懇親会となったが、幸にも、立山の雪解け水から生まれた『百薬の長』と、富山湾の『海の幸』はその質・量ともに大好評で、準備した側としては大いに面目をほどこした。たゞ残念であったのは、当方のPR不足のためか、意外に“昆布”が出席者によりあまり賞味していただけなかったことである。

大会を終えてお帰りの道すがら、天候にも恵まれていたこともあって、多くの会員の方々には、燃えるような立山の紅葉を十分に賞でていただけたであろうか。今、長い準備期間の後、あっと云う間に過ぎ去った3日間の大会をふり返って見て、何はともあれ、無事大過なく大会を終了できたことに感謝の気持で一杯である。そして、この大会を成功に導いて下さった総べての方々に心から御礼申し上げたい。

富山県の伝統産業である医薬品工業界では、新しいバイオテクノロジーの開発・導入により一大躍進すべく、日夜懸命の努力が積み重ねられている。今回、富山での動物学会大会の開催が、一つの刺激剤ともなって、そうした地元産業界の発展興隆のために多少な

りとも貢献できたとするならば望外の喜びである。最後に、本大会開催にあたり富山県ならびに富山市から多大の御援助を頂いたことを、この機会をかりて厚く御礼申し上げる次第である。

## ◆ 教養部

### 日本独文学会北陸支部会開催

「日本独文学会北陸支部第16回総会並びに研究発表会」と厳めしく銘打ったささやかな学会が、10月6日（火）午後1時から同5時45分まで教養部326番教室で開かれた。

日本独文学会というのは、日本の「広くドイツ語ドイツ文学に関心を有する者」（会則）で組織されている学会で、会員数は約2500、その大半は言うまでもなく国公立大学・高専のドイツ語教官である。学会支部は北海道・東北・北陸・関東・東海・京都・阪神・中国四国・西日本の9つに分れていて、北陸支部は新潟・富山・石川・福井の4地区から成り、支部員数は約80名である。これを少いと思えるか、案外多いと思うかは各人の立場によるであろう。北陸支部の行事としては、2年に1度の総会並びに研究発表会を上記の4地区のひとつが順次当番となって開催する。従って次に富山でこの会が開かれるのは8年後ということであって、万事に気忙わしい今の世の中では、かなりユ

ニークなテンポである。

当日の出席者は約50名で、新潟と石川地区から各2名、富山と福井地区から各1名、計6名の支部員の研究発表（1人につき発表25分、質疑応答10分）が行われた。そのうち4つまでが若手の研究者によるドイツ語学の理論・方法及びドイツ語教授法に関するものであり、コンピューターを駆使しての言語研究をめぐって質疑応答も活発で、北陸支部といえども時代の趨勢の外にあるわけではないことが如実に示された。その反面、文学に関する発表が少な過ぎた感がないでもなかったが、幸い本学の吉田清教授（人文）の研究発表「グリルパルツァーのオペラ観」によって支部会の掉尾が飾られた。未筆ながら、この会のために教養部及び本部・人文学部の事務の方々から多大のご配慮を頂いたことに対して、この所を借りて深く御礼を申し上げます。（大谷重彦記）



## ◇体育系サークルリーダー研修会について

本年度の研修会は、2泊3日の日程で山野スポーツセンターにおいて、下記のとおり実施され、各サークル代表者が参加し、熱心な討論を重ね有意義に終了することができましたことを報告するとともに、ここにあらためて関係各位に感謝いたします。

なお、今年度も学外講師を招いて講演を行いました。

### ◎実施概要

期日 昭和62年10月5日(月)～7日(水)

(2泊3日)

場所 富山県体育協会 山野スポーツセンター

(富山県上新川郡大山町本宮)

参加者 体育会役員及び体育会所属サークルのリーダー 64名

講師 西川友之(教育学部助教授)

北村潔和(教養部助教授)

他2名

### 研究項目

ークラブにおけるリーダーの位置・仕事  
(なすべきこと)ー

分科会Ⅰ「体育会のクラブとして目指すもの」

分科会Ⅱ「部活動の強化・充実」

分科会Ⅲ「リーダーとしてなすべきこと」

### 講演

“強くなるには練習するしかない”

前富山大学長

柳田友道

“スポーツ傷害について”

富山医科薬科大学附属病院

整形外科講師

山田 均

“スポーツ時の水分摂取について”

教養部助教授

北村潔和

## 体育会クラブの発展のために

実行委員長 中 本 武 史

体育系サークルリーダー研修会(以下、リー研と略する。)は、その目的を「課外活動のあり方や問題点について、分析検討し、本学体育系各部の発展に寄与するとともに、リーダーとしての資質の向上を図り、あわせてサークル相互の親睦を図る。」として、毎年学生部と体育会が行なっています。

今年も、昨年に続いて大山町の山野スポーツセンターに於て、10月5日(月)～10月7日(水)の2泊3日の日程で行ないました。今回のリー研は、参加者に確固たるリーダーシップを持ってもらうことはもちろん、実際にクラブを運営していくのに必要な知識や心構えなどを身につけてもらうことを目指しました。そのために、体育会クラブのリーダーとして活躍してきた2名の先輩を招いて、学生発表会という形で経験談などを話していただきました。硬式野球部の五十里さんには、彼自身が行なってきたオフシーズンのトレーニング方法について理論と実技を合わせて発表していただ

き、また、水泳部前主将の津野さんには、失敗談を中心にリーダーのなすべきこと、仕事、心構えなど話していただきました。然しながら、全クラブに参加を呼びかけたにもかかわらず、25クラブ45名の参加に終わりました。これには、昨年と同様に教育学部のオリエンテーションが重なったことも原因にあると思われます。

さて、討論会ですが、有効に討論を進めるため、参加者を5つのグループ(当初は6つに分けていましたが、当日の数クラブの不参加のため急遽5つに変更しました。)に分けて、テーマを「クラブにおけるリーダーの位置・仕事(なすべきこと)」として、3回にわたり行ないました。討論は活発なものとなり、積極的な意見交換ができたと思います。

講演は、学外から2氏を招いて行ないました。まず富山医科薬科病院整形外科講師の山田先生に「スポーツ傷害について」という題で、スライドを用いて、ス

ポーツ中に起きやすい怪我や故障についてのお話、前富山大学長の柳田先生に「強くなるには練習するしかない」という題で、先生の学生時代の経験談をまじえながら、不断の練習がいかに大事であるかを、熱く語っていただきました。

講義は、学内から2人の先生を招いて行ないました。まず、教育学部助教授の西川先生に「ヤル気を起こさせるリーダー像」という題で、日頃、先生が体育系サークルについて感じておられることや、スポーツ選手のルール・マナーなどについて、また、教養部助教授の北村先生には「スポーツ時の水分摂取について」という題で、トレーニング前後の水分の取り方、種類、効果についてスライドを使い、興味深く講義していただきました。

全ての講演・講義、討論会の終わった夜、クラブ相互及び、体育会とクラブの親睦を図るため自由交換を行い、明日の体育会クラブのために語り合い、歌いました。

こうして、リーダー研修会は2泊3日の全日程を終了しましたが、研修会が意義のあったものであるかは今すぐには判断できません。参加者の皆さんには、今後、この研修会を1つのきっかけとし、研修会で得たものを忘れないようにして明日の体育会クラブの発展と前進のために生かして行ってほしいものです。

最後に、この研修会を行なうにあたって、ご尽力していただいた学生部、体育教官の方々に感謝をして、挨拶と代えさせていただきます。

## 昭和62年度後学期専門移行者調

(62.10.1付)

学部	入学年度 学 科	専門教育課程移行者数					移行不許 可 者 数	移行対象 者 数
		57	58	59	60	61		
人 文	人 文 学 科				2	90	9	101
	語 学 文 学 科					89	6	95
	計				2	179	15	196
教 育	小学校教員養成課程					133	5	138
	中学校教員養成課程					39	10	49
	養護学校教員養成課程					20	1	21
	幼稚園教員養成課程					30	0	30
	計					222	16	238
経 済	経 済 学 科	1			6	105	44	156
	経 営 学 科		1		5	103	32	141
	経 営 法 学 科	1			6	69	37	113
	計	2	1		17	277	113	410
理	数 学 学 科				1	35	14	50
	物 理 学 科			1	1	24	27	53
	化 学 学 科			1	3	39	6	49
	生 物 学 科				2	28	9	39
	地 球 科 学 科			1		28	10	39
	計			3	7	154	66	230
工	電 気 工 学 科				1	47	11	59
	工 業 化 学 科				1	43	13	57
	金 属 工 学 科			1	5	34	15	55
	機 械 工 学 科				2	46	15	63
	生 産 機 械 工 学 科	1	1		2	36	14	54
	化 学 工 学 科		1		3	32	21	57
	電 子 工 学 科				4	27	23	54
計	1	2	1	18	265	112	399	
合 計		3	3	4	44	1,097	322	1,473

## 昭和62年度後期授業料免除について

昭和62年度後期授業料の免除については、さきに開催の授業料等減免選考委員会の選考を経て、出願者649名(学部592名、大学院54名、専攻科3名)のうち、441名(学部402名、大学院36名、専攻科3名)が全額免除、5名(学部2名、大学院3名)が半額免除を許可され49名が不許可となった。また、154名は超過免除申請することとなった。

なお、授業料免除及び奨学金を希望する者で、不明な点があれば厚生課奨学係又は各学部の学務係(教養部は学生係)に良く相談して下さい。

(参考)前期授業料免除実施状況

区分	出願者	許可者	不許可者
学 部	582名	507名 (114)	75名
大学院	65	60 (20)	5
専攻科	3	3	0
計	650	570 (134)	80

( )は半免で内数

## 授業料免除の収入限度額について

授業料免除は「経済的な理由によって納付が困難であり、かつ、学業優秀と認められる場合」に許可されることになっています。

授業料免除を受けることのできる「世帯の年間収入総額」は、所得の種類、世帯の構成、通学形態が異なるので一概には言えませんが、例えば、給与所得者世帯の場合は右表の金額程度以下になります。

(例) 4人世帯—両親・本人・公立高校生  
5人世帯—両親・本人・公立高校生・中学生

級 地	世 帯	収 入 金 額	
		自宅通学	自宅外通学
A 級 地 (大 都 市 等)	4人世帯	560万円	612万円
	5人世帯	614万円	658万円
B 級 地 (A級地以外)	4人世帯	545万円	598万円
	5人世帯	598万円	647万円

(注) 級地の区分は学資負担者の住所によるものです。  
詳細は学務係へ問い合わせして下さい。

## 昭和62年度学生健康保険組合予算・ 昭和61年度学生健康保険組合決算について

標記について、去る10月21日の理事会において、下記のとおり承認されましたので、お知らせします。

### 1. 昭和62年度学生健康保険組合予算

#### <預り金>

収 入 の 部		支 出 の 部	
繰越預り金	8,702,400円	運営費へ繰入金	5,820,300円
新入生等組合費	6,980,600円	返還金	96,000円
		預り金	9,766,700円
合 計	15,683,000円	合 計	15,683,000円

#### <運営費>

収 入 の 部		支 出 の 部	
前年度繰越金	3,566,353円	医療費等給付金	5,000,000円
昭和62年度預り金 より繰入金	5,820,300円	事務運営費等	613,000円
預金利息	614,000円	予備費	4,387,653円
合 計	10,000,653円	合 計	10,000,653円

2. 昭和61年度学生健康保険組合決算

<預り金>

収 入 の 部		支 出 の 部	
繰越預り金	6,839,700円	運営費へ繰入金	4,986,400円
新入生等組合費	6,930,100円	返 還 金	81,000円
		預 り 金	8,702,400円
合 計	13,769,800円	合 計	13,769,800円

<運営費>

収 入 の 部		支 出 の 部	
前年度繰越金	2,899,901円	医療費等給付金	4,586,739円
昭和61年度預り金 より繰入金	4,986,400円	事務運営費等	347,330円
預 金 利 息	614,121円	翌年度繰越金	3,566,353円
合 計	8,500,422円	合 計	8,500,422円

○昭和61年度の医療費給付件数は983件で、1件当たり医療費給付金額は4,656円でした

## 学生健康保険組合同規約の一部改正について

このことについて、至る10月21日の理事会において、下記のとおり承認されましたので、お知らせします。

昭和63年度から1人当り年間医療費給付の最高限度額を従来の35,000円から45,000円に値上げし、昭和63年4月1日から実施し、昭和60年度入学生から適用します。(規約一部改正条項：第22条第2号)

なお、昭和59年度以前入学生(組合費700円納入者)については、1人当り年間医療費給付の最高限度額は従前どおり30,000円ですのでご注意ください。

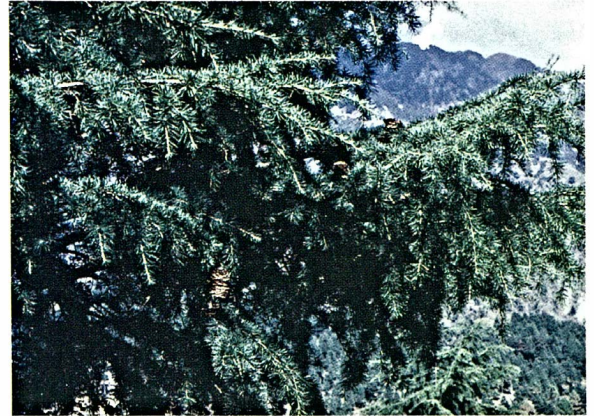
## キャンパス樹木誌(1)

### ヒマラヤスギ

ヒマラヤスギはその名のごとく、ヒマラヤ山脈の南麓に沿ってアフガニスタンからネパール西部にまで分布している。学名を(Cedrus deodara)というが、deodaraはヒンドゥー語で神の木を意味する。しなやかな枝が横に張り出して独特の風格ある樹形を示すが、かつてヒマラヤ地方ではこの木は神聖な樹とされていたという。かつてインド北部、ヒマラヤ山麓のダラムサラという町を訪ねた時、標高2000mに達する急峻な山の斜面にヒマラヤスギの美しい森林が成立していたが、現地で見ると本場もののヒマラヤスギの林に思わず感動したのを思い出す。

ヒマラヤスギはマツ科の植物で、系統的にはカラマツ属(Larix)に近いが、常緑性である点でカラマツ属と区別される。比較的涼しく乾燥した土地を好み、樹高50m、胸高直径2mにも達する巨木になる。毬果は長さ約10cm、直径約5cmの卵形で、熟するとバラバラに分解して羽のついた種子を飛ばす。

日本には明治の初期に入ったと言われる。日本の気候でもよく育ち、風格のある美しい樹形が好まれて広く栽培されている。枝が水平に広がること、かなりの



ヒマラヤ山麓に自生するヒマラヤスギ  
(インド、ヒマチャル・プラデシュ州にて)

大木になることのため、公園のような広い場所に適し、単木で、あるいは数本まとめて植栽される。ただ剪定や刈込みはこの木の本来の風格を損い、樹勢を弱めるので好ましくない。

本学キャンパスでは理学部一号館の前および構内数カ所に植えられている。(教養部教授 小島 覚)



## 学園ニュース編集委員



学 生 部 長	瀧 澤 弘	理 学 部	松 本 賢 一
人 文 学 部	山 口 幸 祐	〃	広 岡 公 夫
〃	櫛 木 謙 周	工 学 部	多 々 静 夫
教 育 学 部	佐 々 木 浩	〃	杉 本 益 規
〃	山 本 都 久	教 養 部	高 安 和 子
経 済 学 部	大 野 正 道	〃	山 本 孝 一
〃	相 澤 吉 晴		